April 24, 2011

日本的教育理念についての私案 **ver. 0.2**

インターナショナルスクールを日本に設立し、アジアの子供達に日本で学んでもらうことの意義は、大きく２つあります。

（１）禅の精神

ひとつは、「禅」の考え方を取り入れることです。禅は、世界各国の文化人はもちろん、経済人にも受け入れられています。スティーブ・ジョブズ氏が、若い頃から禅に傾倒していたことは知る人ぞ知る話です。iPodのシンプルなデザインには、禅の精神が反映されているとも言われています。

単に量を追求していた20世紀は終わり、21世紀は質を高めていくことの重要性が増しているのです。禅の、自分のありのままの姿を見つめ究極的には自分とまわりのすべてのものが一つであることを悟ったり、無駄なものをそぎ落として本質のみを残す、究極のシンプリシティーを追求する考え方は、21世紀において興味深い示唆を与えてくれます。本当の美は自分のありのままの姿を突きつめていったり、足すことからではなく省くことによって生まれてくるのかもしれません。本質を見極める能力を身につけてもらうため、この禅の精神を教育に取り入れることは誠に意義深いことだと考えています。

（２）一人一人の価値観と幸せの実現

もうひとつは、一人一人が自分自身の個性と価値観に基づいた幸せを見つけ、異なる価値観を持つ他人を尊重し、他人や自然と共感・共生していく能力を身につけるにあたり、日本古来の価値観が役に立つということです。

20世紀の繁栄をもたらした西洋型資本主義社会は、「微分型」と言えるでしょう。すなわち、世の中を単純化し、経済活動をいくつかのファクターに分けて、重要なファクターの値を改善することで全体を押し上げようとするやり方です。例えばビジネスにおいては、ROEや売り上げ利益率といった値に着目し、その数値を改善することで企業価値を向上させる、というアプローチをとります。

こうしたアプローチは、社会そのものが単純で生産性が低い時には、それなりに有効に働きます。しかしそこでは、特定のファクターだけがクローズアップされ、そこだけを劇的に改善させることで全体を底上げするという、一種のレバレッジを効かせた成長に依存しているわけです。選ばれなかったファクターは、いつまでも改善されることなく、残存することになり、いびつな形の成長になっています。

同時に、経済価値はそのファクターを改善するのが得意なごく少数の勝者に集中し、大多数の人間はその道具となってしまう、数少ない価値（ファクター）に基づいた階級社会が出来上がります。本来社会はもっと複雑なものであり、今の時代は、これまで置き去りにしてきたことからのいびつさが顕在化し、社会問題化してきているのです。たとえば私が携わってきた投資の世界でいうと、原油価格はいわゆるファンダメンタルズの観点からは１０年ぐらいで３０ドルから８０ドルぐらいを目指して推移すべきだったとしましょう。社会主義国においては、ずっと３０ドルに固定されていて、その無理が限界を超えた瞬間、突然８０ドルに調整されますが、そんな急激な変化には社会が耐えきれません。だからこそ、需給で少しずつ調整していく市場主義、即ち資本主義が勝ち残ったはずでし

た。ところが資本主義が行き過ぎて、お金の量が増えすぎ、かつ皆が同じ価値基準で動くようになった結果、原油価格が１４０ドルを越えたところでリーマンショックが起こり、急速に３０ドルまで下落してしまいました。こうした現象は、資本主義の行き過ぎが露呈した最たる例と言えます。今や社会は、このような行き過ぎた資本主義にも耐えられなくなってきているのです。

このような時代背景の中、これからは選ばれたファクターだけが大切にされたり、その操作に長けた者だけが勝者になるのではなく、世の中にある多様なファクター（価値観）が大切にされ、全ての人々が、各々の価値観を尊重され、幸せになれる社会を作ることが肝要です。
その意味で、今こそ全体を上げる「積分型」である–日本的な（東洋的な）やり方が必要とされていると思います。

皆が画一的な価値観のみを追求するのではなく、社会や人の多様性を認め、その良さを尊重する人材を育てていきたい、そのような人材育成にあたり、二つの日本古来の価値観がとても役に立つと考えます。

まず第一に、人間はもちろん他の動物や植物などの自然を尊重し、それらのありのままの姿を受け入れる、あらゆるものに神が宿っているという八百万（やおよろず）の神的価値観です。
例えば、寿司職人はまず素材を選ぶ修行から始めます。食材を加工するのではなく、あくまで素材の良さを尊重してそれを生かそうとします。同じように大工さんも素材を探すことから始めます。素材を道具として加工するのではなく、そのよさを生かして建造物を作っていこうとします。日本庭園には、自然から掘り出したままの岩が置かれています。
その結果、修行にはとても時間がかかり、一人前になるのに何十年もかかります。一人前になってもそれがゴールではなく、一人一人の職人が、自分自身の価値観にさらに磨きをかけていく、それを一生かけて突き詰めていくという文化があります。そのような世界では、いわゆる評価基準はひとつではないのですから、「落ちこぼれ」は生まれにくく、様々な個性をもった素晴らしい寿司職人や大工の親方が生まれてきます。これが、一つのブランドでの寿司チェーンや大型の大工型建築事務所ができにくい理由でもあります。しかしそこには、一人の天才や大きな力がある人が全体を考え、残りの人はそれを支えるだけという現代資本主義的な世界とは全く違う世界があります。ある特定のものや人だけが素晴らしいのではなく、あらゆるものが、誰もが各々の良さを持っているのです。その良さを認め、伸ばしていくことがとても大切だと思います。

生徒一人一人が、自分自身の良さや好きなことを知り、それを大切に伸ばしていけば、彼らは、他人の良さにも気づき、尊重し、ひいてはあるがままの自然の良さにも気づき、尊重するようになると思います。これからのリーダーには、そのような考え方が必要だと思います。

第二に、「道」の精神です。茶道、華道、柔道など、日本人は何でも「道」にしてしまいます。ひとつの物事をこつこつと続ける精神です。必ずしも経済的利益に直結しなくとも、時間をかけてよりよいものを創って行く、磨きをかけていく。プロセスそのものが大切であり、ある意味目的になっているのです。そこには、他者との競争という視点はな

く、あくまで自分自身が日々成長していくことへの純粋な喜びがあり、プロセスそのものを厳しく切磋琢磨しながら楽しむという姿勢があります。
「結果」を目的にすると、その結果を達成した段階で力尽きてしまいます。「プロセス」が目的であれば、人は永遠に成長し続けていくことができます。そのように自分で自分の成長を感じることができれば、生涯を通じて皆夫々が幸せだと感じやすいのではないでしょうか。

自分の好きなものを見つけたら、時間をかけてでもその道を極めていくべきだと思いますが、今のように西洋的な画一的な基準ができてしまっている社会にいると、その前に多くの人が諦めてしまいます。しかし先ほどの寿司職人の例で言うと、今は自分が握っている鮨に低いランク付けがされたとしても、ずっとその道を極めていったら、40年後の評価がどうなっているかは誰にも分かりません。

登山家の栗城史多氏から伺った話があります。無酸素で山を登っていて苦しくなると、最初は「自然に打ち勝ってやれ」とか「できっこないと言った人達を見返してやれ」といった気持で自分を奮い立たせようとしますが、これでは長く続かないそうです。そうではなく、明るく楽しく元気な気持ちを持ち、「ありがとうございます」と、今の苦しみを含めて自分をここに生かしているもの全てに感謝する、それが一番だそうです。
自然を含めた全てのものを尊重し感謝すること、他人に勝つのではなく自分に克ち、自分自身の成長そのものに喜びを見出すこと。そして、そのプロセスを楽しむこと。それらを自分が実行し、かつ他の人達も巻き込んでその輪を広げていける、そんな人材こそが、これから世の中を創っていくのにふさわしいのです。そしてその育成には、日本的な考え方が必ずや役に立つと考えています。

以上